

「古き良き時代」

私の父は大酒飲みで知られていました。心に何か鬱屈したものがあつたのでしょうか、毎晩浴びるように飲んでいました。東京オリンピックの頃ですが、里帰りした父の妹たち（つまり私の叔母たち）は「あの大酒飲みのあんたの父さんも東京にいた頃は禁酒会に参加していたらしいわよ、おかしいね」と笑っていました。東京青木会が戦前は「禁酒会」と名乗っていたことは紹介しましたが、大正 7 年に発足した会は 95 年経った今も細々とつながっています。青木村出身の五島慶太氏（旧姓小林）の尽力により千代田区三番町旧上田藩邸内に千曲寮が完成、その下で初代管理人になった早川喜八氏（やはり青木出身）が「禁酒会」をスタートさせたのが始まりだそうです。

父が東京にいたのは旧制上田中学を卒業後に逓信省に勤めながら夜学に通い、その後昭和 10 年代中頃に召集される迄の 10 年余ことです。きっと軍部の台頭により世の中が息苦しく感じられる時代に、禁酒を實踐するストイックな会だと信じていました。ところが、ある時先輩が「禁酒会という飲み会だよ」とバツサリ。そうだったのかと心の中で笑えました。この諧謔的なネーミングから当時の雰囲気がよく理解できます。

今では新幹線で 1 時間半弱ですが、当時は上田も（特に青木は）遠かったです。遙々東京に出てきた若者にとって食べさせてもらえるし飲ませてもらえる気心の知れた故郷の人の集まる楽しい会だったと想像できます。関東大震災、昭和 大恐慌と続き大っぴらに「飲み会」とは言えない風潮の中で「禁酒会」は気兼ねなく過ごすことのできる場所だったと思います。

時は戦後になって、焼け野原の東京で海軍（短現）出身の若者たちが勉強会を重ねていました。生意気盛りの「はみ出し者」を自称していたので「半纏会」と名付けたそうです。その中に何故か陸軍出身の五島昇氏が一人参加しており、聞けば毎回五島家で開催されたらしいです。何故か？「五島家には何かしら食べ物があつたし酒もあつた。だから自然とみんな集まるようになった」と。中曾根康弘元首相と親しかった赤澤璋一氏（通産省出身、元ジェット口理事長）、永末英一氏（元民社党委員長）、中川幸次氏（元野村総研社長）等の思い出話で盛り上がる宴会でのことで、今から 30 年以上も前の中曾根政権誕生の少し前

のことです。「ただ食って飲んでいただけではない。日本の将来についてよく議論したよ。でも食べ物も酒もあったから会は続いた」と正直です。

いずれも今思えば食べ物で緊密な人間関係が形成できた古きよき時代のことで、翻って、飲食に満たされている今の時代は（本当に豊かどうかは別の問題として）、何の会であつても存続の意味を若い世代に引き継ぐには知恵と工夫が必要なようです。関東同窓会も世代を超えて集まるには何らかの強い理由が必要かもしれません。

そこにいくと同期はありがたいです。無条件で「古き良き時代」を共有しています。しかし、ここにも歴史はあります。いつの頃からか上原昇君（2組）が同期生に少しずつ声掛けし輪を広げ、毎年のように小まめに関東同期会を開催し、そのうちにクラス単位のネットワークが組成しました。そもそも最初はいつの頃だったか。1990年代だったのではないかと思います。そのお蔭で、2013年関東同窓会総会（主幹事）では65期は大きな存在感を示すことができました。来年（2016年）は地元で「六五会」の諸君を中心に卒後50周年記念の同期会開催を企画していると聞きました。ありがたいことです。何があつても無条件で参加します。（2015年1月13日 記）

初期の頃の同期会風景

